

ことばの迷い道

ゴム時間の危機

おのりんたろう
小野 林太郎

民博 人類文明誌研究部

「ジャム・カレット」というインドネシア語を聞いたことがあるだろうか？ インドネシアをこよなく愛する「インドネシアフリーク」の方々であれば、インドネシア語にちなむ話題のひとつにしたことのある方も多いと思う。そんなわけでわたしもこのコラム記事を依頼されたとき、ある意味で「コテコテのネタともいえるこのことばを話題にするのは、ちよつと躊躇した。しかし、このような素敵なコラムでもない限り、「ジャム・カレット」について書けるチャンスはもうなかるうと考え直し、臆面もなく取り上げることにした次第である。

じつは理由はもうひとつある。タイトルにもあるように、この「ジャム・カレット」ということばが、今やインドネシアで危機に瀕しているのではないかとわたしは勝手ながら案じているのだ。

さてこのインドネシア語の意味だが、「ジャム」は時間、「カレット」はゴムを意味する。よって直訳すると「ゴム時間」となる。ここでピンと来た人は素晴らしい。きつとインドネシア人と何かを共有できる持ち主であること間違いない。

ヒントはゴムのもつ性質にある。ゴムといえは、タイヤの素材や輪ゴムとして日本人にもなじみある物質で、ゴムノキの樹液を原料として製品化される。インドネシアはオランダ統治下にあった植民地時代より、このゴムの世界的な生産地として知られ現在でも天然ゴムの生産国トップ3に入っている。そんなお国柄もあり、こんなことばが生まれたのだと思うが、ゴムというのは「伸び縮み」する。ここまで説明すれば、何となく読めてきたぞ、という方が多数を占めるのではないだろうか。

そう、つまり「ゴム時間」とは「時間は伸び縮みするもんだ」という意味で、インドネシアの場合には特に「伸びる」方に力点が置かれる。

わたし自身の経験を踏まえても、インドネシアでは何かと「待たされる」ことが多い。いや、正確に言うともかった。時間どおりに何かが始まるということも、定刻どおりに船や電車、飛行機が発着することなどもほぼあり得なかった。そんなときに「ジャム・カレットだから仕方ない」と言えば、まあそうだよなと皆で納得し、あとはおしゃべりしたり、寝たりして気長に待つというのがインドネシアの日常茶飯事的にみられる光景だった。慣れてしまうと（というか諦めると）、それほど苦にならないのが不思議で、逆にイライラがなくなり、心の平安が訪れ、人間の生活はこうあるべきではないのか、とさえ思うようになる（多分）。少なくともわたしはそう感じ、「ジャム・カレット」という表現のなかに、インドネシア人の奥深い知恵や哲学の真髄を感じ、尊敬の念すら込めて使ってきた。

ところが近年、このことばが危機に瀕している気がしてならない。定刻どおりに物事が進むことが以前よりも増えつつある。待ち合わせなど、むしろ相手が待っていることの方が増えてきた。インドネシア人社会に何か大きな変化が起こりつつあるのだ。わたし自身は、こうした変化はスマホの普及とも連動しているのではという勝手な印象をもっている。とはいえ、インドネシア人がゴム時間への理解や愛着を失った訳でもなく、このことばを使う機会が減りつつも、まだまだ健在だ。ここは焦らず、ゴム時間の思考で今後の成り行きを見守っていききたい。